

『古代アメリカ』20, 2017, pp.135-150

<調査研究速報>

ペルー北海岸、クルス・ベルデ遺跡出土土器の分析概報

莊司一歩

(総合研究大学院大学、日本学術振興会特別研究員DC2)

ヴァネッサ・クリスティーナ・ラ・ロサ・バレーラ

(トルヒヨ大学)

1. 本論文の目的と意義

本稿では、ペルー北海岸のクルス・ベルデ遺跡から出土した土器に関する分析結果の概略とそこから導かれる予察を示す。その目的は大きく2つある。1つは、出土土器の分析および、他の遺跡の出土例との比較から、クルス・ベルデ遺跡の編年的位置づけを明らかにすること。もう1つは、同遺跡から出土する土器がこの時期の北海岸に広く分布することに着目し、この土器が広域に分布する現象の背景をクルス・ベルデ遺跡出土土器の詳細な分析から考察することである。

クルス・ベルデ遺跡は、ペルー北海岸で土器の利用が開始されてから、非常に精巧で装飾に富んだボトル型土器や鉢型土器などの製作が確立するまでの期間にあたる、形成期前期（1800B.C. ~1200B.C.）および中期（1200B.C. ~800B.C.）^{註1)}の活動によって形成されたと考えられてきた [Vásquez 1998, Vásquez 私信]。しかしながら、そこで出土する土器資料の実例や総数、タイプごとの内訳などの詳細はこれまで明らかにされてこなかった。そこで本稿では、筆者らが2016年の発掘調査によって収集した土器資料を提示し、上述の目的に沿った分析と比較を試みる。これらの考察は、形成期のデータの増大が求められるチカマ谷においてクルス・ベルデ遺跡の編年的位置づけを再検討し、精巧なボトル型土器に比べて研究蓄積が浅く、装飾の少ない実用的な無頸壺が、どのような遺跡間交流の中で製作され、利用されていたのかを明らかにする点で意義を有する。

2. ペルー北海岸における形成期前期・中期の土器に関する先行研究

ペルー北海岸における初期の土器出土状況を語るうえで欠かせないのは、1940年代に行われた「ビルー谷プロジェクト」の成果である。世界で最初に行われたセトルメント・パターンの調査として著名なこのプロジェクトは、ペルー北海岸のビルー谷を対象に、先土器時代から植民地時代にわたる長期間の文化的変遷を遺跡の踏査と発掘調査から明らかにした [Strong and Evans 1952]。そこで先土器時代に続く土器文化として提唱されたのが「グアニヤペ文化」である。ストロングとエバンスは、「グアニヤペ文化」の活動時期にあたる「グアニヤペ期」を前期・中期・後期の3つに分類し、沿岸部に位置するワカ・ネグラ遺跡の発掘調査によって層位的に得られた土器資料を、セリエーション分析によって前期・中期グアニヤペ期に当たる [Strong and Evans 1952]。これらの土器は、胎土と装飾技法によって「グアニヤペ土器」と「アンコン土器」に大別され、さら

に無文土器 4 種、装飾土器 11 種の 15 タイプに細分されたうえで、その胎土や色調、器形、装飾技法など非常に詳細な記述がタイプごとに残されている [Strong and Evans 1952 : 277-297]。これによると、ワカ・ネグラ遺跡で出土した装飾土器のほとんどは無頸壺と呼ばれる頸部のない壺型の土器であり、クピスニケ様式で盛んに製作されたようなボトル型の土器はごくわずかしか出土していない [Strong and Evans 1952 : 257]。これらのタイプ分類における成果は、ビル一谷の中流域で再調査を行ったゾウベック [Zoubek 1997] やモチエ谷の出土土器データの整理を試みたビルマン [Billman 1996] によってもそのタイプ名が利用されるなど、北海岸のクピスニケ土器に先行する初期の土器文化として、いまだにその影響力は大きい。

しかし、このプロジェクトによるワカ・ネグラ遺跡の発掘はいくつかの問題を残している。一つは、当時、放射性炭素年代測定法が実用化されたばかりであったため、その数値データ [Willey 1953: 37] の精度は現在の水準に照らし合わせると不十分であること、もう一つは、この発掘が人工層位に基づいて行われたものであつたことである。この絶対年代データおよび、ワカ・ネグラの人工層位とセリエーションの解釈には、研究者間に大きな齟齬を残した [e.g. Zoubek 1998, Billman 1996]。

この問題点を指摘し、ワカ・ネグラ遺跡のデータを再解釈したのは鶴見 [2008] であった。鶴見は、前・中・後期グアニヤペを、ヘケテペケ谷中流域のラス・ワカス遺跡における発掘調査で自分が確立した形成期前期～中期の土器編年と神殿建築に対応した放射性炭素年代をもとに、それぞれ形成期前期～中期 I 初頭、中期 I (1250B.C.~1000B.C.)、中期 II (1000B.C.~800B.C.) として対応させた [鶴見 2008 : 309-326]。ヘケテペケ谷とビル一谷が距離的にやや離れているとはいえ、発掘調査によって確立された精緻な土器編年を基礎としている点や、さらに他の河谷を含めた広い地域で編年の整合性を検証している点で、その成果は非常に重要なものである。また、これらの地域間の比較によって、形成期中期 I に他のアンコン土器に先駆けて出現する”Ancón Fine Line Incised” [cf. Strong and Evans 1952: Fig.50] のうち、口縁部から胴部にかけて斜めの刻線を平行に連続して施す「平行斜線文」の汎地域的な共通性を指摘している [鶴見 2008: 325]。

一方で近年、モチエ川下流域沿岸部のグラマローテ遺跡での調査成果が発表され [cf. Prieto 2015, Baldeos et al. 2011]、その土器の様相が明らかになった。調査者のプリエトは、この遺跡の活動時期を放射性炭素年代測定法に則して 3 時期 (Phase1: 1500-1400 B.C., Phase 2: 1400-1300 B.C., Phase 3: 1300-1200 B.C.) に分けているが、いずれも形成期前期の範疇に収まるものである^(註2)。この遺跡では、ワカ・ネグラ遺跡やラス・ワカス遺跡でも確認されている貼付突帯や区画刺突を施す土器とともに、ワカ・ネグラ遺跡で”Ancón Broad Line Incised”としてタイプ分類された、太い刻線が施される土器が最も多く出土している [Prieto 2015: 436-438; 458, Fig.5.13]。しかし、このタイプの土器はワカ・ネグラ遺跡において、中期グアニヤペ期から出土しており [Strong and Evans 1952:Figure. 34]、中期グアニヤペ期をおよそ形成期中期と考える編年観 [鶴見 2008: 309-322] からすれば、グラマローテ遺跡の土器出土状況とは異なる様相を示す。ワカ・ネグラ遺跡ではボトル型の土器が少ないのに対し、グラマローテ遺跡の太刻線文はボトル型土器に施されることが多いなど、器形ごとの施工技法の違いを反映している可能性もあるが、現状で決定的な解釈は提出されていない^(註3)。また、グラマローテ遺跡の Phase 2 からは細刻線の土器が出土し始め [cf. Prieto 2015: 410 Table 5-3]、三角形などの幾何学文様を持った無頸壺が含まれるなど、ラス・ワカス遺跡における形成期前期の層との共通点がある一方、平行斜線文に類似した文様パターンを持つ土器がすでに出土し始めていることや [cf. Prieto 2015: 411]、ラス・ワカス遺跡の下方に開く円弧の文様パターン [鶴見 2008: 89] が欠如しているなど、差異もみられる。

このように、各河川流域の発掘事例や土器資料の分析が進むことによって、北海岸に分布する当該期の土器の共通性や地域的な差異が徐々に明らかになってきた。その一方で、そうした土器資料の詳細な分析や事例報

告に大きな進展がみられないのが、ヘケテペケ谷下流域とチカマ谷である。

ヘケテペケ谷の下流域には、クピスニケ様式の土器を伴う多くの埋葬が検出されたプエマペ遺跡がある。この埋葬に伴う土器は形成期中期から後期にかけて利用されたものであることが明らか一方で、それ以前にあたる前期プエマペ期の土器は、平行斜線文の無頸壺を含むいくつかの事例が報告されている [Elera 1998: 547-548, Fig.67,68] にも関わらず、その数は少なく、時期差も明瞭でない。

チカマ谷においては、形成期前期から中期の活動を伴う遺跡に、先土器時代の遺跡として著名なワカ・プリエタ遺跡がある [cf. Bird et al. 1985]。歳原がこの土器資料の図面をいくつか報告しており、その中には斜線文を中心とした”Ancón Fine Line Incised”的明瞭な資料が存在する [Toshihara 2002: 545-546, Fig.11, 12]。しかし、報告数が少ないと、体系的な分析が行われていない点に問題を残す。また、近年、ディルヘイ [Dillehay et al. 2012a, 2012b] らが同遺跡で再調査を行っているが、バードらの過去の調査と同様に先土器時代の活動に焦点を当てているため、形成期の土器に関するデータは提示されていない。

以上のように、ペルー北海岸の形成期前期から中期を対象とする研究は、ワカ・ネグラ遺跡の土器タイプ分類や、ヘケテペケ谷での土器編年の確立、モチエ谷における形成期前期の土器様相の解明など多くの進展がみられ、北海岸に分布する土器の地域的な共通性や各遺跡の差異が明らかになってきた。しかし、こうした作業は一部の地域では進展せず、ムラがあるのが現状である。とくに、チカマ谷は、ヘケテペケとモチエ、ビリーヴ谷の間に立地するため、北海岸の土器の共通性や地域性がどのような土器製作や搬入・搬出のもと形成されていたのかを考える上で重要な地域であり、研究の進展が求められている。さらにいえば、こうした土器装飾における共通性とその広域分布という現象の意味するところを明らかにするには、これらの土器について製作技術や文様パターンに関するより詳細な差異の有無を各遺跡において検討する必要がある。これらの問題意識に基づいて、次節からクルス・ベルデ遺跡において出土した土器の分析と考察を試みる。

3. クルス・ベルデ遺跡の概要

クルス・ベルデ遺跡は、ラ・リベルタ州のチカマ川下流域沿岸部にある（図1）。現在の海岸線から約200mの距離にある海岸段丘の微高地に立地しており、チカマ川河口から北に約6km、最寄りのマグダレーナ・デ・カオ村から南西に約4kmのところに位置している。

このクルス・ベルデ遺跡の存在に関して、トルヒーヨ大学のセグンド・バスケスが簡易的な報告を1998年に [Vásquez 1998]、その後2008年には小規模な発掘調査を実施した。その結果、形成期前期～中期の土器と、居住址とみられる石積みの両面壁が出土した [Vásquez 私信]。遺跡には、有機物に起因する黒色土と貝殻などの混じる土壤が一定の範囲で広がっている。その南西部には2.5mほどの高さを持つマウンドが築かれて

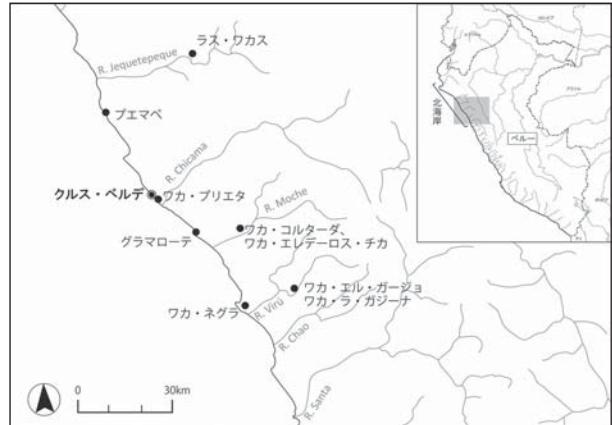


図1 クルス・ベルデ遺跡および、本稿で言及する遺跡の位置

おり、調査者のバスケスは、公共建造物とその周囲に居住域を有する遺跡として、この遺跡を解釈している[Vásquez 私信]。また、このマウンドから北東へ 150mほど離れたところに、別の独立したマウンドが存在するが、土器がまったく存在しないことから、セグンド・バスケスはこの遺跡を先土器時代のものだと指摘している[Vásquez 私信]。

このように、バスケスの調査によって形成期前期～中期に属する土器や住居址、2 つのマウンドの存在などが示唆されているが、その詳細な報告は行われておらず、遺構

の構成や活動時期は不明瞭なままである。これをふまえ、クルス・ベルデ遺跡の編年的な位置づけを明らかにするために 2016 年に 3 週間の発掘調査を実施した。

発掘調査は、2 つのマウンド群のうち海側のマウンドとその間に広がる平坦な地形を含む A 地区を対象に行った [La Rosa and Shoji 2017]。この A 地区のマウンド上に 2×18m のトレンチを 1 か所、同じく平坦な地形上に 2×2m の試掘坑を 5 か所設置した (図 2)。このうち、形成期の土器が出土したのは、平坦な地形上に設置した O1N20、O1N42、O1N64 の 3 つの試掘坑であり、本稿の分析対象となる資料はこの発掘グリッドから得られたものである。また、過去にバスケスが調査した試掘坑 (S.V.2) の清掃を行い、その廃土から土器の破片資料を収集するとともに、居住址と想定される石積み両面壁を再検出したほか、試掘坑の断面観察から層位を確認した。S.V.2 を含むこれら 4 つの試掘坑では、それぞれ床面とみられる活動面が検出されている。マウンドに近い S.V.2 と O1N20 では 3 つの活動面とそれぞれ 100 cm と 80 cm の堆積が確認されている一方、O1N42 と O1N64 では 2 つの活動面とそれぞれ 60 cm と 50 cm の堆積が確認されている。この堆積の厚さから、マウンドに近いほどより活発な活動が行われていたと考えられる。発掘作業は地山層まで達しており、地表面から地山層まで一貫して形成期に属する土器が出土する。2×2m の試掘坑では建築物を検出することはできなかったが、S.V.2 で検出された前述の石積み両面壁の存在や食糧残滓を多く含む包含層と比較的薄い堆積、調理に利用されたと考えられる無頸壺などの粗製土器が多く出土していることから、この遺跡における A 地区の平坦な地形上には形成期の居住活動によって形成された遺構が集中していると考えられる。

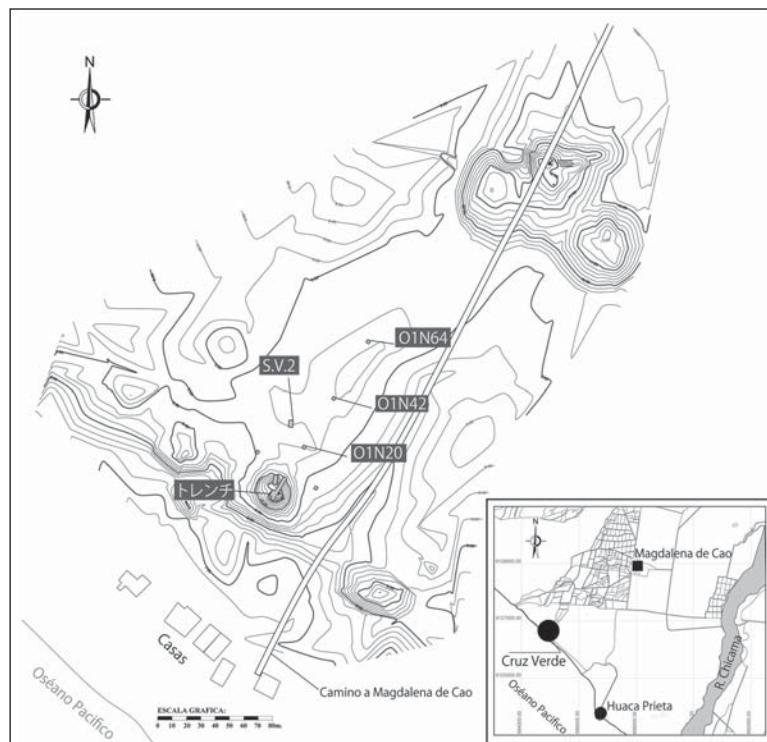


図 2 クルス・ベルデ遺跡の地形測量図と発掘坑の位置

4. 土器分析の方法

土器分析の対象となったのは、S.V.2 を含む4つの試掘坑から出土した土器破片資料である。各辺が1 cmに満たない小破片を排除すると、破片資料の総数は380点となり、このうち口縁部破片が42点、口縁部ではないが器形の判別に足る頸部破片と装飾を持つ破片が23点出土した。このように、発掘調査が行われた範囲の狭さとその堆積の少なさゆえに土器破片資料数は他の遺跡に比べて非常に少ない。そのため、これらの資料は定量的な分析に基づいた精緻なタイプロジーの確立には適していないといえる。しかし、前述のとおり、形成期前期・中期におけるチカマガ谷やそのほかの河谷の土器資料には不明瞭な点が多くあり、土器の共通性や地域性を理解するうえで課題を抱えている。そのため、各河谷において当該期の土器利用の様相を明らかにして比較を積み重ねる必要があり、クルス・ベルデ遺跡の資料もチカマガ谷におけるデータの欠如を補い、調査が進む北部や南部河谷との比較を可能にするうえでとりあげる価値がある。

そこで、クルス・ベルデ遺跡における出土資料の少なさという方法論的課題を乗り越えるために、以下の手順で土器分析を実施した。最初に、破片資料の全380点を対象に、土器を構成する胎土と色調、表面調整の観察を行いくつかのグループに分類した。土器の胎土や色調、表面調整は、分析対象とするすべての破片資料で観察可能な属性であり、これによって資料数の少なさを補いながら、クルス・ベルデ遺跡出土土器の構成を明らかにした。次に、口縁部破片、装飾土器破片、器形の明瞭な破片資料計65点を抽出し、上述のグループ間で器形、装飾技法、文様・パターンなどの諸要素の差異を検討した。そして最後に、ここまで得られたクルス・ベルデ遺跡の土器資料の特徴と傾向をもとに、他の遺跡で報告されている土器との比較を行った。

なお、先述のように、クルス・ベルデ遺跡では最大3つの活動面が検出されるなど、層位的な前後関係が明瞭な資料も多く含まれる。しかし、分析した土器資料の差異や変化を層位的に見出すことはできなかった。これは、一つに各試掘坑ごとの特徴的な土器破片資料数が極めて少ないと、および、後述するように、クルス・ベルデ遺跡の活動期間が形成期前期と中期をまたぐような長期のものではなく、比較的短期間の活動によって残されたものであるとの、2つの理由によると考えられる。

5. 分析結果

5-1. 全土器破片資料の観察：Pasta A と Pasta B

全380点の土器破片資料を分析した結果、クルス・ベルデ遺跡から出土した土器の胎土は、基礎となる粘土の色調、造岩鉱物などの胎土に含まれる鉱物粒子の種類と形状、サイズなどの特徴から大きく2つのグループに大別できることが明らかになった。胎土の観察と分類は肉眼で行い、その撮影とサンプルの詳細な観察にはデジタルルーペを用いた^(註4)。この胎土観察による分析の結果を表1に示した。Pasta A グループは、灰色(Hue N 5/5)から暗褐色(Hue 10YR3/3)の粘土を基調とした胎土に特徴を持つものである。焼成がしっかりと行われていないと、やや明るい褐色(Hue 10YR 6/1)の芯を残す場合もあるが、その色調に大きな差異はない。このPasta Aは胎土に含まれる粒子の特徴からA-1とA-2の2つのサブグループに分けられる。A-1の胎土には鉱物粒子が多く混じり、1~2 mm大の石英や長石などの白色鉱物が目立つ。黒色の角閃石もやや混じるが、その相対的な量は多くない。また、これら白色鉱物の粒形は角の立ったものが多く、その大きさもばらつきが大きい。粘土自体の粒子はやや緻密な印象であり、焼成も比較的よいものが多い。一方のA-2では、粘土中に混入する鉱物粒子が極端に小さく、一見すると鉱物粒子の混入がないようにすらみえるのが特徴的である。粘土の色調はやや

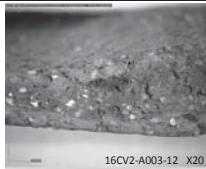
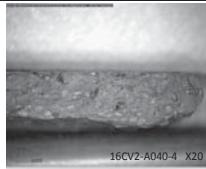
	Pasta A-1	Pasta A-2	Pasta B-1	Pasta B-2
断面サンプル				
色調	暗灰色～暗褐色	灰色～暗褐色	明赤色～赤褐色 暗灰色の芯が残る場合が多い	明赤色～赤褐色 暗灰色の芯が残る場合が多い
粒子	石英、長石を多く含む 角閃石がやや混じる	石英、長石を多く含む 角閃石がわずかに混じる	石英、長石、角閃石が同様の割合で 多く混ざる	石英、長石、角閃石が同様の割合で 多く混ざる
粒形	角の立ったものが多い	判別不能	角の立ったものに加えて、 丸みを帯びた粒子が混じる	丸みを帯びた粒子が非常に多い
粒径	2 mm～0.5 mm	0.5 mm以下	2 mm～0.5 mm 丸みを帯びた粒子は1mm程度で均一 のサイズになる傾向	0.5 mm以下
器形サンプル図				
主要器種	無頸壺	ボトル	無頸壺、鉢	ボトル、鉢
無頸壺の器形	口縁はやや水平のものが多い	—	口縁がやや立つものが多い	—
断面形	あまり肥厚しないものが多い	—	肥厚のするものが多い	—
施文具				—
施文パターン	繊維状の削痕が刻線内に残る 細くやや浅い切り込み線（1mm以上）	直径1～2mmの刺突	刻線内の削痕は極めて弱い 極細の切り込み線（1mm以下）	—

表1 クルス・ベルデ遺跡出土土器の胎土比較表



写真1 Pasta A-1 の土器グループ



写真2 Pasta B-1 の土器グループ

明るい褐色(Hue 10YR 6/1)を呈するものがあるが、A-1 グループとの差異が明瞭なほどではない。胎土や鉱物粒子は緻密だが、やや脆い印象を受ける。

Pasta B グループは、明赤褐色(Hue 2.5YR 5/6)から橙色(Hue 5YR 6/6)の粘土を基調とした胎土に特徴を持つものである。この赤色は、良好な焼成によって発色したものと考えられ、器壁が厚く焼成の悪い土器破片はオリーブ灰色(Hue 2.5GY 5/1)の芯が残る場合が多い。こちらも、胎土に混入する鉱物粒子の特徴から 2 つのサブグループに分けられる。B-1 グループは、石英、長石などの白色鉱物と角閃石やそのほかの鉱物が同程度の割合で混ざる。Pasta A-1 に比べると黒色の鉱物のサイズが大きく、量も多いことが特徴的である。また、これら鉱物の粒形には丸みを帯びたものが多い。しかし、これらの丸みを帯びた鉱物の量は土器破片によってばらつきが大きく、Pasta A と比較すると多いといった程度である。また、Pasta A-1 に含まれている角の立った白色鉱物も同時に混入しているのが一般的である。Pasta B-2 は、B-1 と同様に石英、長石、角閃石など多様な鉱物を含むが量は少なく、鉱物粒子のサイズも極端に小さく均一である。この胎土に角の立った大きな石英が混じることはほぼない。とくにこの胎土は B-1 と比べて丸みを帯びた鉱物がより多く混じる点に特徴がある。これらの鉱物は粒径が 1 mm 前後でそろう傾向にあり、様々な鉱物種を含んでいる。このことから、これらの鉱物は浸食作用によって形成された砂質であるといえ、土器胎土に人為的に混入された可能性が高い [cf. Druc and Chavez 2014: 49]。

以上のように胎土の観察から、クルス・ベルデ遺跡の土器は A と B の 2 つの胎土グループに、そしてそれぞれのグループは 2 つのサブグループに分けられることが明らかになった。Pasta A-1 グループは 380 点中 175 点、Pasta A-2 は 18 点、Pasta B-1 は 176 点、Pasta B-2 は 5 点、分類不能なものとして 6 点の土器破片数を示している。なお、これらの胎土分類は、あくまで肉眼観察による基礎的なものであり、今後各グループ内でより細別された土器タイプが設定されうる可能性もあることを断っておく。次に、これらの土器グループに基づいて、器形や文様の明確な土器破片を中心に観察し、器形構成や装飾技法、文様パターンなどの差異を明らかにしていく。

5-2. 特徴的な土器破片資料の観察：細刻線文土器の多様性

口縁部破片、装飾土器破片、器形の明瞭な破片資料を合わせた計 65 点をもとに分析を進めた。器形の判別が可能な 45 点の土器破片のうち、無頸壺が 37 点と圧倒的に多い。ビレー谷やモチエ谷などの事例 [e.g. Strong and Evans 1952, Zoubek 1997, Prieto 2015 ほか] と照らし合わせても形成期前半の特徴をよく示している。また、装飾技法については、装飾のある土器破片 31 点中 27 点が刻線文であり、その刻線の幅は最大でも 2 mm を超えることはない。なお、平均して 3.4mm 幅の太刻線を持つ土器が報告されているグラマローテ遺跡の例 [Prieto 2015: 408-409] と比べてみると、クルス・ベルデ遺跡の刻線は概して細刻線であることがわかる。加えて、塗彩や刺突などの他の装飾技法はボトルや鉢型の土器に限られている。このように、クルス・ベルデの土器は無頸壺がその大部分を占め、その装飾技法はほとんどが細刻線によるものである。また文様パターンについても、平行する刻線を基調としたものに限られ、他の遺跡で報告される幾何学文様や、刻線で区画した内側を刺突で埋める区画刺突文などは出土していない。

次に、各胎土グループの特徴を見ていく。それぞれの胎土グループで、器形や装飾技法、文様パターンに一定の傾向が認められた。Pasta A-1 は 26 点中 17 点が無頸壺、1 点が短頸壺、8 点が器形不明であることから、無頸壺を主要な器形とすることがわかる。この無頸壺の口縁部は、やや水平に近い角度で口唇部に達し、口唇部の中心は丸みを帯びて口縁内部へ突き出る形となる破片が多い（表 1 の器形サンプル図を参照）。また、口縁部はあまり強く肥厚しないものが多い。施文のパターンとしては、一方向のみの斜線が多い傾向があり、下方に開く二重円弧で区画し、その中を刻線で充填するという特徴的なパターンも 1 点認められた。その装飾技法

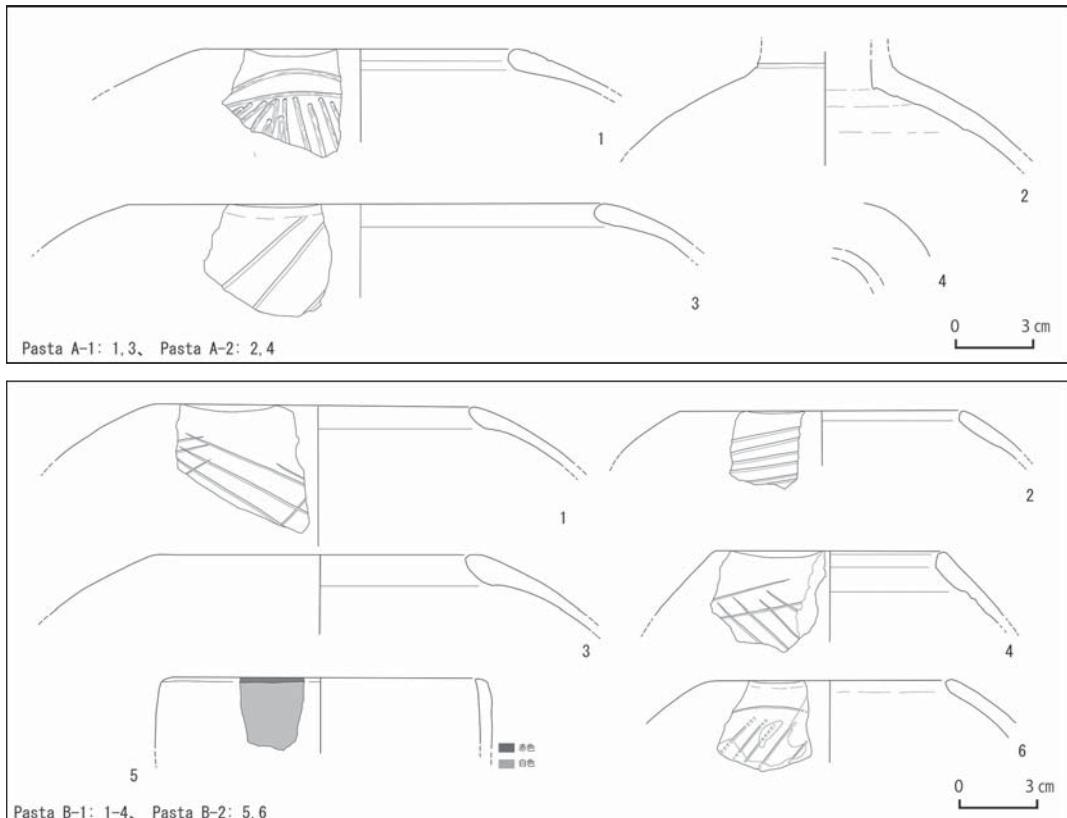


図3 Pasta A と Pasta B の土器破片実測図

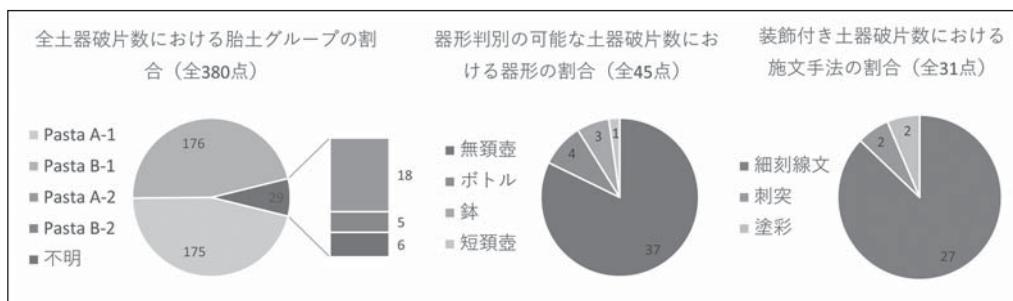


図4 クルス・ベルデ遺跡の土器破片資料における胎土・器形・施文

についてみてみると、11点の刻線を持つ破片資料のうち刻線幅の平均は1.16mm程度であり、後述するPasta B-1と比べるとやや太い傾向にある。そのほか、刻線は粘土が柔らかい状態、あるいは濡らした施文具を用いて、刻み込んだ切り込み線とみられ、線の両側には押し出された粘土が盛り上がる。刻線の断面は浅いU字を呈するものが多く、内面には纖維状の深い擦痕が残るものも多い。粗い纖維を持つ植物質の施文具が使用された可能性が高い。

Pasta A-2は5点中3点がボトル型土器、2点が器形不明であることから、ボトル型土器が主要な器形となる。長頸ボトルの頸洞部が出土しており、これはPasta A-2グループの明瞭な資料となる（図3-2）。この破片は、

胎土の類似性と器形から、ワカ・ネグラ遺跡で報告される”Ancón Polished Black” [Strong and Evans 1952: 257, は Fig.36] に類似している。また鑄型ボトルの鑄部分にあたる小破片が 1 点のみ出土している。この破片資料は前述の長頸ボトルよりも丁寧につくられ、褐色の器壁には赤色塗料が塗られている。そのほか、胴部破片として列状の刺突文が施された事例があるが、その精巧な表面調整と胎土、破片の形状からおそらくボトルの一部と考えられる。しかし、ペルー北部山地などで報告される非常に作りのよいボトル型土器と比べると、概して器壁が厚く、焼成も悪く脆いのがこれらの土器に特徴的である。

Pasta B-1 は 28 点中 18 点が無頸壺、2 点が鉢、8 点が器形不明となるなど、無頸壺を主要な器形としながら少量の鉢を伴う。無頸壺の口縁は、Pasta A-1 と比べるとやや垂直方向に立ち上がるものが多い傾向が指摘できる。口唇部は器面の外側が一番高くなる傾向にあり、内側はナデ調整が施されることによって平らな面が作られる。また、口縁部の肥厚する土器片がやや多いといえる。文様パターンには交差する斜線のモチーフが多く、Pasta A-1 と比べて斜線の角度は水平に近いものが多い。装飾技法については、刻線を持つ破片資料 15 点に対し、平均 0.85 mm の刻線幅を示すなど極細刻線が多く、断面形はやや深い V 字型の切り込み線となる傾向がある。刻線の内部は光沢をもつほどになめらかなものがあるなど、擦痕はごくわずかしかみられない。先端の鋭いなめらかな施文具で施文される傾向にあったといえよう。Pasta A-1 で前述した、区画充填刻線と同じモチーフがこの胎土グループでも 1 点出土している。その文様パターンの類似性は非常に高いが、V 字の断面を残すような先端の鋭いなめらかな施文具を利用するなど、装飾技法と胎土グループは Pasta A-1 の前例と明瞭に異なる。

Pasta B-2 は 3 点中 1 点がボトル、1 点が鉢、残りの 1 点が器形不明となり、ボトルと鉢を主要な器形としている。1 点のボトルは頸部片であるが、長頸であったのか、鑄型であったのかは判別できない。また、このグループは、胎土に起因する赤色の器面の外側に白色の塗彩を施す鉢型の土器を含んでいる。いずれにしろ、特徴的な土器破片全体のうち Pasta A-2 と Pasta B-2 の資料数は少ない。

以上の分析を通して、大きく 2 つのことが明らかになった。1 つは、クルス・ベルデ遺跡から出土した土器のほとんどが無頸壺であり、細刻線を装飾技法とした斜線の文様パターンを基調とするものであったということである。後述するように、これらの土器はワカ・ネグラ遺跡の”Ancón Fine Line Incised” と非常に高い類似性を見せる。しかし、ワカ・ネグラ遺跡や他の河谷の遺跡では、これとは別のタイプの土器がともに報告されており、クルス・ベルデ遺跡とは土器の出土状況が異なる。すなわち、ストロングとエバンスのタイポロジー [Strong and Evans 1952] に従えば、ビルー谷で報告される土器のうち、クルス・ベルデ遺跡ではわずか 1 タイプしか出土していない。今後、出土土器数の増加が望まれるため、断定はできないが、クルス・ベルデ遺跡における土器タイプバリエーションの極端な少なさが予察されるのである。このことは、同遺跡の性格や遺跡間交流のあり方を考えるうえで重要な知見といえる。もう 1 つ明らかになったのは、クルス・ベルデ遺跡における 4 つの胎土グループに、それぞれに対応する器形や口縁部形態、文様パターンと装飾技法など多くの要素に対応関係がみられることであった。すなわち、クルス・ベルデ遺跡から出土する細刻線文を持つ土器には、胎土や装飾技法、器形の点でバリエーションが存在し、北海岸の細刻線文土器をひとくくりには扱えない状況が推察できる。

6. 考察

6-1. クルス・ベルデ遺跡出土土器の編年的位置づけ

上述の分析結果をふまえ、クルス・ベルデ遺跡出土土器の編年的位置づけを明らかにするために、北海岸の各遺跡の土器出土状況を無頸壺の装飾技法に注目して整理した（表 2）。なお、ワカ・ネグラ遺跡の土器資料に

	装飾技法	サンプル図	形成期前期			形成期中期						
			ワカ・ネグラ 前期 ニアベ 期	ラス・ワカ ス H期	グラマ ローテ	ワカ・エ ル・ガ ジョ/ ラ・ガジ ナ	ワカ・ネグラ 中・後 ニアベ 期	ラス・ワカ ス TB期	クルス ・ベルデ	ワカ・エレ ーロス・ チカ	ワカ・コルタ ーダ サン・ロレン ソ期	
無頸壺	刺突		○	○	○	○	○	○				
	刻み貼付突帯		○	○	○	○	○	○			○	
	区画刺突				○	○	○	○			○	
	太刻線				○	○	○					
	細刻線			○	○	○	○	○	○	○	○	
ボトル	長頸ボトル			○	○		○	○	○	○	○	
	鋌型ボトル			○			?	○	○	○	○	
	参考文献	Strong and Evans 1952: 284, Fig.48-C / Strong and Evans 1952: 280, Fig.46-A / Strong and Evans 1952: 285, Fig.49-A / Strong and Evans 1952: 290, Fig.51-G / Strong and Evans 1952: 288, Fig.50-A を引用。縮尺不同。	Strong and Evans 1952: 277-297; 鶴見2008: 309-322	鶴見2008: 88-103	Prieto 2015: 388-511	Zoubek 1997: 124-186	Strong and Evans 1952: 277-297; 鶴見2008: 309-322	鶴見2008: 103-153	Toshihar a 2002: 576, fig. 55	Nesbitt et al. 2008: 280, fig. 16; Nesbitt 2012		

表2 北海岸における形成期前期・中期の無頸壺の装飾技法と出土状況

については、先述したように編年的位置づけに関する様々な解釈が提出されている [e.g. Strong and Evans 1952, Bilman 1996, Zoubek 1997, 鶴見 2008]。本稿では、層位的に出土した豊富な土器資料に基づくヘケテペケ川中流域の土器編年と年代測定のデータによって、ワカ・ネグラ遺跡の土器資料を詳細に検討した鶴見 [2008:309-322] の解釈に従い、同遺跡の資料を前・中・後期ニアベ期に分類し、前期ニアベ期を形成期前期、中・後期ニアベ期を形成期中期と仮定して論考を進める。その理由は、モチエ川中流域の土器編年や絶対年代 [Nesbitt et al. 2008] との共通性が高いなど、現状で最も整合性のとれた編年案といえるためである。

表2から読み取れるのは、細刻線を使用した装飾技法が北海岸の形成期前期から中期の各遺跡で広く出土していることである。とくに、まとまった資料数を持つワカ・ネグラ遺跡では、細刻線を装飾技法とする”Ancón Fine Line Incised”的土器タイプが、同遺跡の後半にかけて急増するほか [c.f. Strong and Evans 1952: Figure 34] 、グラマローテ遺跡においても形成期前期の終わりにかけて細刻線の土器が出現し増加し始めると指摘されている [Prieto 2015: 436]。すなわち、細刻線は当該期の北海岸において無頸壺に一般的に施された装飾技法であり、とくに形成期中期以降にその利用頻度が高まったと想定できる。本稿では、前述したようなクルス・ベルデ遺跡の土器出土状況から、この細刻線という装飾技法に注目して、その文様パターンの差異を検討する。

細刻線の文様パターン	サンプル図	形成期前期			形成期中期					
		ワカ・ネグラ 前期 グアニヤペ	ラス・ワカス 後期	グラマローテ	ワカ・エル・ ガージョ / ラ・ガジーナ	ワカ・ネグラ 中・後期グア ニヤペ	ラス・ワカス TB期	クルス・ ペルデ	ワカ・エレ テーロス・ チカ	ワカ・コルターダ サン・ロレンソ期
円弧			○							
自然主義的図像				○						
その他：幾何学文様			○	○	○					
平行斜線				○		○	○	○	○	○
交差斜線						○		○		
区画充填斜線						○	○	○	○	○
参考文献		Strong and Evans 1952: 277-297; 鶴見2008: 309-322	鶴見2008: 88-103	Prieto 2015: 388-511	Zoubek 1997: 124-186	Strong and Evans 1952: 277-297; 鶴見2008: 309-322	鶴見2008: 103-153		Toshihara 2002: 576, fig. 55	Nesbitt 2008: 280, fig. 16; Nesbitt 2012

サンプル図は上から、鶴見2008: 89, 図4-2-5を一部改変 / Prieto 2015: 487, Fig. 5-60 / Zoubek 1997: 154, Figure.5-10-E / Strong and Evans 1952: 288, Fig.50-A / Strong and Evans 1952: 288, Fig.50-G / Strong and Evans 1952: 288, Fig.50-J を引用。縮尺不同。

表3 北海岸における形成期前期・中期の無頸壺の文様パターンと出土状況

細刻線を持つ無頸壺の文様パターンに着目して表2と同様の各遺跡の出土状況を比較し、表3に示した。この表からわかるように、形成期前期においては下方に開く円弧や動物などの自然主義的図像、その他の幾何学文様が多く描かれるのに対し、形成期中期になると、斜線を基調とした平行斜線、交差斜線、区画充填斜線などの文様が多く描かれるようになる。これらの斜線を基調とした文様パターンは、ワカ・ネグラ遺跡の”Ancón Fine Line Incised”に集中してみられる（図5）。ストロングとエバンス [Strong and Evans 1952: 288] によれば、この”Ancón Fine Line Incised”という土器タイプは、同遺跡から出土する他のアンコン土器グループと比べて、胎土や表面調整の点で大きく異なっている。その特徴は次の3点にまとめられる [Strong and Evans 1952: 286]。
①中期グアニヤペのアンコン土器グループが、概してきめの細かい粘土と細かい鉱物粒子によって構成されているのに対して、”Ancón Fine Line Incised”はきめが粗く、鉱物粒子のサイズも大きい。②色調は赤褐色から黒であるが、灰色の芯が残り赤褐色の胎土がその外側に形成されているなど、2色の層を呈している事例が多い。③これらの細刻線は平行する斜線のモチーフを基調としており、先端の鋭い施文具を使用して、土器の器面が湿った状態で深く切り込むように刻まれている。この3点の特徴と文様パターンからわかるように、クルス・ペルデ遺跡から出土する細刻線文の土器は、”Ancón Fine Line Incised”と非常に類似性が高く、その出土状況は形成期中期に集中している。とくに、色調や先端の鋭い施文具、交差斜線という文様パターンの点から、Pasta B-1グループの土器に近い特徴を有している。

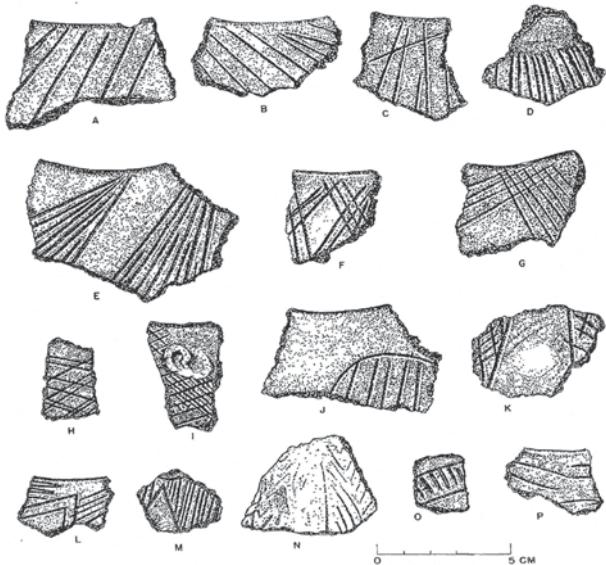


図5 ワカ・ネグラ遺跡の”Ancón Fine Line Incised”土器
[Strong and Evans 1952: Fig.50]

一方で、形成期前期にあたるグラマローテ遺跡からも、平行斜線文の細刻線が施された土器が出土している。調査者のプリエト [Prieto 2015: 408, 436] は、この遺跡から出土した土器に施された装飾のうち、最も多いものは太刻線を装飾技法とするものであり、細刻線を装飾技法とする”Ancón Fine Line Incised”が大半を占めるワカ・ネグラ遺跡と対照的であると指摘している。しかし、無頸壺に絞ってみれば、最も多いのは刺突や刻み貼付突帯などの装飾技法であり [cf. Prieto 2015: 410, Table 5-3]、形成期前期のそのほかの遺跡とも共通する様相を示す。そうした大勢の中で、グラマローテ遺

跡では形成期前期の終わりにかけて細刻線の無頸壺が出土するようになり、その量が増加する傾向にある [Prieto 2015: 436]。この細刻線の土器の中で一番多いパターンは平行する縦線と横線 [Prieto 2015: 487, Fig. 5-61 右] であり、口縁部に施された水平線から平行斜線が伸びるもの [Prieto 2015: 487, Figure 5-61 中央] もあるという [Prieto 2015: 411]。その一方で、プリエトは、グラマローテ遺跡では交差斜線の文様パターンがなく、鳥などの動物を描いた自然主義的な図像がある点で、ワカ・ネグラ遺跡の細刻線、すなわち”Ancón Fine Line Incised”との差異を強調している [Prieto 2015: 437]。むしろグラマローテ遺跡におけるいくつかの細刻線は、複雑な幾何学文を構成するなど、ビルー谷のワカ・ラ・ガジーナ遺跡との類似が指摘されている [Prieto 2015: 445, e.g. Zoubek 1997: 154, figure 5.10; Prieto 2015: 486, Fig.5-59]。このように、グラマローテ遺跡における細刻線の土器には、平行する直線などの”Ancón Fine Line Incised”に類似する文様パターンがあるものの、その差異が明瞭に存在する。

クルス・ベルデ遺跡から出土した細刻線の土器と類似する事例は、ヘケテペケ谷とモチエ谷でも報告されている。中でも、クルス・ベルデ遺跡から出土した区画充填斜線（図3-1を参照）については、遺跡間の比較が比較的容易である。例えば、ヘケテペケ谷のラス・ワカス遺跡では、形成期中期に対応する”TB Marrón”的り込み線グループの中に類例がみられるほか [鶴見 2008: 112, 写真 4-56-50]、近年調査成果が報告されたモチエ谷のワカ・コルターダ遺跡における San Lorenzo 期（1100～800 B.C.）の資料にも類例が報告されている [Nesbitt et al. 2008: 280, fig.16-o, Nesbitt 2012]。さらに、同じくモチエ谷のワカ・エレデーロス・チカでも同様の土器文様がみられる [Toshihara 2002: 576, fig.55-b,d,e]。加えて、ラス・ワカス遺跡やワカ・コルターダ遺跡では、絶対年代のデータが建築フェイズとの関連から明確に示されており [鶴見 2000: 74-77, 153, 図4-146, Nesbitt 2012]、この点をふまえても両遺跡から出土する区画充填斜線と平行斜線文の土器が形成期中期の文化層に対応することは間違いない。

以上のように、無頸壺の装飾技法と文様パターンに着目して、クルス・ベルデ遺跡の土器と北海岸の他遺跡の土器を比較した結果、クルス・ベルデ遺跡の細刻線を施した土器は、ワカ・ネグラ遺跡の”Ancón Fine Line Incised”

にきわめて類似していることがわかった。さらに、区画充填斜線や平行斜線文がヘケテペケ谷やモチエ谷の遺跡における形成期中期の文化層から出土していることを鑑みても、これらの土器は形成期中期に編年上位置づけられる。すなわち、土器分析と先行研究で示されているデータの比較から、クルス・ベルデ遺跡では少なくとも形成期中期にその活動が行われたといえる。加えて、ここまで分析と考察から明らかのように、細刻線による平行斜線と区画充填斜線文の土器は、形成期中期において北海岸に広く分布している^(註5)。では、こうした土器の広域分布はどのような背景のもとに起こった現象なのだろうか。この点について次節で検討を試みる。

6-2. 土器広域分布の背景

クルス・ベルデ遺跡のデータから細刻線を施した無頬壺の広域分布を考えるために、先ほどの土器分析に立ち戻ってみたい。クルス・ベルデ遺跡出土の土器を分析した結果、これらの土器資料は大きく4つの胎土グループに分類でき、それぞれに対応する器形や口縁部形態、文様パターンと技法など多くの要素に対応関係がみられることがわかった。つまり、これまで単一の土器タイプとしてその同質性に焦点が当てられてきた”Ancón Fine Line Incised”に、細かな差異に基づいた多様性があることが、クルス・ベルデ遺跡の土器分析から明らかになつたのである。

4つの胎土グループのうち、無頬壺を主体とするのはPasta A-1とPasta B-1の2つのグループである。文様については、それぞれのパターンに多寡はあるものの、両グループから平行斜線、交差斜線、区画充填斜線がみられることから、大きな差異は見いだせない。しかし、その胎土や施文具、無頬壺の器形、口縁部の形態などの点では、両者に明瞭な差異が認められた。これらの差異は、いずれも土器製作の細かな技術と密接に関わっている。すなわち、粘土や混和材の入手などの土器胎土の準備や、施文具の選択と施文の技法、口縁部形態の微妙な差異を生み出す土器成型の技法などがこれに当たる。特筆すべきは、Pasta A-1とPasta B-1の両者で認められる区画充填斜線の施された土器破片であり、明瞭に異なる二つの土器胎土において、異なる施文技法を行い、同様の文様パターンによって製作されている。視覚的に認識の容易な文様パターンと異なり、土器の完成品から上述の細かな差異を読み取って模倣することは難しいことから、Pasta A-1とPasta B-1の差異は、詳細な製作技術を共有するような土器製作集団の違いを反映していると考えられる。一遺跡内の同じ文様であっても、複数集団が製作を手がけていたと推察され、細刻線土器が出土する他遺跡で同様の分析をすれば、やはり製作集団の違いが認められる可能性が高い。つまり、このことは形成期中期における細刻線土器の広域分布が、一ヵ所で作られた土器が搬入・搬出ことによって生まれた現象というよりも、複数の土器製作集団が同様のモチーフを用いた模倣を繰り返しながら、各地で製作した結果、生まれた現象であったことを示唆する。こうした現象は、直接的あるいは間接的にしろ、土器製作集団間の交流に支えられていたのであり、そうした緩やかな集団間の交流が形成期中期以降に北海岸の下流域で活発化する神殿活動に伴って行われていたと予察される。

7. 結論と課題

本稿における分析と遺跡間の比較によって、クルス・ベルデ遺跡出土の土器資料は”Ancón Fine Line Incised”と共に通性が高く、形成期中期に該当するものであることが明らかになった。このことは、形成期中期のクルス・ベルデ遺跡における土器資料の実例を示し、土器製作技法を中心とした分析を行うことで、チカマ谷におけるデータの欠如という課題を補う結果となった。その一方で、形成期前期に該当する土器破片は今回の発掘調査

で出土していないため、今後の継続的な精査が求められる。また、本分析を通して、斜線を基調とする細刻線文土器がこの時期の北海岸に広く分布することが再確認された。一方で、これまで各地域で統一的にたらえられがちであった、”Ancón Fine Line Incised”的土器に、土器製作技術に基礎を置く差異が見いだせることが、この分析から明らかになった。このように、広域に展開する土器において技術的な差異の存在を指摘できることから、製作者集団の複雑な交流と各地で分立して行われた土器製作によってこの現象が支えられていたという見通しを得ることができた。

しかしながら、本稿の分析は対象となる資料の少なさという課題を有しており、クルス・ベルデ遺跡で利用された土器の様相に関する予察を示すに留まった。今後の土器資料の増加によって、より通時的な土器利用の変化に関する視点を補う必要がある。また、クルス・ベルデ遺跡の土器は”Ancón Fine Line Incised”を主体としており、他の遺跡と比較して、土器タイプのバリエーションが極端に少ないことが明らかになった。これはクルス・ベルデ遺跡が居住活動を中心に形成されたという、遺跡の性格に起因する可能性がある。こうした遺跡差を解釈するためには、神殿遺跡出土の土器との比較によって、神殿活動とクルス・ベルデ遺跡の活動との関係性を明らかにする必要がある。おそらく、土器製作に関する知識や情報、土器に対する需要の差異に起因すると想定されるが、この点も今後の課題となる。

【謝辞】

本稿の執筆にあたって、関雄二教授（国立民族学博物館）に指導していただいた。また、クルス・ベルデ遺跡の発掘に際して、トルヒヨ大学の Segundo Vásquez 教授やペルー文化省ラ・リベルタ州支部の Jesús Briceño 氏にお世話になったほか、図面の作成には Eduardo Eche、Martín Serquen、Cristian Azañero 氏にご協力いただいた。さらに、鶴見英成氏、Gabriel Prieto 氏には図面の使用に際して便宜を図っていただいた。なお、本研究は JSPS 科学研究費補助金（研究課題番号：16J06775）、平成 28・29 年度 総合研究大学院大学 地域文化学専攻・比較文化学専攻 海外学生派遣事業、平成 27 年度 公益財団法人高梨学術奨励基金（課題名：先史漁撈集落における空間構造と物質文化の考古学的研究）によって実施された。この場を借りて感謝の意を表したい。

註

- (註 1) 日本のアンデス調査団が提唱する編年 [大貫・加藤・関 2010] を使用する。
- (註 2) グラマローテ遺跡におけるプリエトの調査では、10 点の放射性炭素年代測定法による絶対年代が提示されており、うち 8 点が床に切り込まれた炉から採取された植物質のサンプルである [Prieto 2015: 127]。出土コンテクストは明らかであり、海洋リザーバー効果も想定できないことから、その確度は高いとみられる。
- (註 3) 調査者のプリエトは、ワカ・ネグラ遺跡の絶対年代データが不足していることを最初に断ったうえで、同遺跡において細刻線の土器が多く太刻線の土器が少ないと、グラマローテ遺跡において細刻線が少なく太刻線が多いことの違いを地域差として解釈した [Prieto 2015: 438-439]。すなわち、太刻線はモチエ谷からビルー谷に導入されたために、ビルー谷ではその出土時期が遅く、グラマローテ遺跡の Phase 2~3 に細刻線が増加するのは、この時期に両地域の交流が活発化したためだとする仮説を示した [Prieto 2015: 438-439]。
- (註 4) 胎土の観察に際して、色調の記述については農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』、胎土内の鉱物粒子や粒径の識別については Druc and Chavez [2014] を参照した。

(註5) 単一方向の平行斜線文の広域的な分布は、すでに鶴見が指摘している通りである〔鶴見2008:325〕。鶴見は、”TB Marrón”における通常の刻線による「平行斜線文」と「切り込み線文」の2つのグループに中期Iと中期IIの時期差を見出している。しかし、この「切り込み線文」グループの中にも、模倣された平行線文があることもあり、写真や図面からだけでは他遺跡の出土状況をとらえがたい。おそらく中期Iの平行斜線文は、口唇部直下の1cmほどに外周する平滑化された部分にまで斜線が均一に届いているかどうかが、指標となりうる。本稿の図3におけるPasta A,3の破片資料はその類例となりうるが、切り込み線が施されており、施文技法の同一性までは指摘できない。いずれにせよ、形成期中期にこれらの斜線文が該当することに問題はない。

参照文献

- Baldeos, Jhon, Pedro Caceres, Roy Lezama, Elvis Monzon, Lorenzo Risco and Aldo Watanabe
 2011 *Estudio de la cerámica del periodo Inicial del sitio Pampas Gramalote, valle de Moche.* Informe de prácticas pre-profesionales. Escuela de Arqueología, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Nacional de Trujillo, Trujillo.
- Billman, Brian R.
 1996 *The Evolution of Prehistoric Political Organizations in the Moche Valley, Peru.* Unpublished Ph.D. Dissertation, University of California, Santa Barbara.
- Bird, Junius. B., John. Hyslop and Milica Dimitrijevic Skinner
 1985 *The Preceramic Excavations at the Huaca Prieta, Chicama Valley, Peru.* Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 62(1), New York.
- Dillehay, Tom. D., Duccio Bonavia, Steven Goodbred, Mario Pino, Victor Vásquez, Teresa Rosales T., William Conklin, Jeff Splitstoser, Dolores Piperno, José Iriarte, Alexander Grobman, Gerson Levi-Lazzaris, Daniel Moreira, Marilaura López, Tiffiny Tung, Anne Titelbaum et al.
 2012a Chronology, Mound-building and Environment at Huaca Prieta, Coastal Peru, from 13700 to 4000 Years Ago. *Antiquity*, 86(331), 48-70.
- Dillehay, Tom D., Duccio Bonavia, Steve L. Goodbred Jr., Mario Pino, Victor Vásquez and Teresa Rosales T.
 2012b A Late Pleistocene Human Presence at Huaca Prieta, Peru, and Early Pacific Coastal Adaptations. *Quaternary Research*, 77(3), 418-423.
- Druc, Isabelle C. and Lisenia Chavez
 2014 *Pastas cerámicas en lupa digital: Componentes textura y tecnología.* Deep University Press. Blue Monds, Wisconsin.
- Elera, Carlos G. A.
 1998 *The Puémapa Site and the Cupisnique Culture: A Case Study on the Origins and the Development of Complex Society in the Central Andes, Perú.* Ph.D. Dissertation, University of Calgary.
- La Rosa, Vanessa and Kazuho Shoji
 2017 *Informe final del proyecto de investigación arqueológica: Cruz Verde, valle de Chicama, provincia de Ascope, departamento de La Libertad, Perú (2da Temporada, 2016) -Excavación-* Informe presentado al Ministerio de

- Cultura del Perú, Lima.
- Nesbitt, Jason.
- 2012 *Excavations at Caballo Muerto : An Investigation into the Origins of the Cupisnique Culture*. Ph D. Dissertation, Yale University, New Haven.
- Nesbitt, Jason, Belkys Gutiérrez and Segundo Vásquez
- 2008 Excavaciones en Huaca Cortada, complejo de Caballo Muerto, valle de Moche : un informe preliminar. *Boletín de arqueología PUCP* (12):261-286.
- 大貫良夫・加藤泰建・関雄二
2010 『古代アンデス：神殿から始まる文明』朝日新聞出版, 東京.
- Prieto, Gabriel
- 2015 *Gramalote: Domestic Life, Economy and Ritual Practices of a Prehispanic Maritime Community*. Unpublished Ph.D Dissertation, Department of Anthropology, Yale University, New Haven.
- Strong, William. D. and Clifford Evans
- 1952 *Cultural Stratigraphy in the Virú Valley, Northern Peru: the Formative and Florescent Epochs* (Vol. 4). Columbia University Press, New York.
- Toshihara, Kayoko
- 2002 *The Cupisnique Culture in the Formative Period World of the Central Andes, Peru*. Ph. D. Dissertation, University of Illinois, Illinois.
- 鶴見英成
2008 『ペルー北部、ヘケテペケ川中流域アマカス平原における先史アンデス文明形成期の社会過程』東京大学大学院総合文化研究科博士論文 東京.
- Vásquez, Segundo
- 1998 Cruz Verde: del Arcaico al Formativo, un ensayo de interpretación. *Revista Arqueológica Sian* 5: 6-8.
- Willey, Gordon R.
- 1953 *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley*. Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology Bulletin 155. United States Government Printing Office, Washington DC.
- Zoubek, Thomas A.
- 1997 *The Initial Period Occupation of Huca El Gallo/Huaca La Gallina, Viru Valley, Peru and its Implications for Guanape Phase Social Complexity*. Ph.D., Yale University, New Haven.
- 1998 Archaeological Evidence of Preceramic/ Inicial Period Ancestor Worship and Its Relevance to Early Andean Coastal Social Formations. *Journal of Steward Anthropological Society* 26(1-2): 71-112.

原稿受領日 2017年5月18日
原稿採択決定日 2017年8月14日